

いちやもん

お転婆団 下川おかし

女1 ギャラリー「猫の家」オーナー

女2 八田小百合という人

女3 小百合の母

女4 桂 オーナーの友人

女5 リリイ 桂のブログのフォロワー

郊外の駅を降りて、少し歩く。商店街を一本奥に入ったところ

道端に出した手書きのボードをたよりに、小さな庭に入っていく

大きな窓とガラスドアの向こうに、二〇畳くらいの空間があなたを待っている、

ギャラリー「猫の家」である。

舞台はギャラリーの室内。

女1が白いカーテンを引いて、その向こうにあるものを隠した。

女1 (電話に話している) …うん。ごめんね、あわただしくて。お客さん？ 下見だけだから、断つてない。うん、すぐ終わると思う、だから、私で大丈夫かってこと？ 失礼ね。…ありがとう。…桂こそ、…気をつけてきてね。

部屋の中央に、テーブルとイス。

女1がそこでパソコンを使い始めると、

チャイムの音。

女1、出迎えに行き、女2を伴い戻ってくる。

お辞儀したり、名刺出したり、椅子をすすめられたり、

女1、女2、向かい合って腰かける。

女2 …(女1に企画書を渡す)

女1 演劇展？

女2 ここが、ギャラリーだから、「演劇展」としようと思うんです。

女1 「演劇の展覧会」だから「演劇展」、期間は一週間でしたね、何点くらい展示されますか？

女2 金土日で4公演にしようと思ってます。

女1 では4作品ですね。

女2 いえ、一つの作品を4回

女1 1点

女2 ええ、まあ1点、といえば1点

女1 1点ですか…

女2 だめでしょうか。

女1 それは、別に私がいいとか悪いとか決められるものでもないですけど、…、  
展って言ったらなんかこうたくさんある感じ

女2 そうですね。そうですね、そうか。

女1 あ、待つて待つて、それでもない、それでもない、「演劇展1」、ね、次  
に「演劇展2」をやる、何回かやれば、1点じゃない… (パソコンで検索してい  
る) 「展。平らに広げ並べる」

女2 平らに

女1 広げ並べる

女2 広げ

女1 並べる

女2 並べる…

女1 (うなづく)

女2 平らにひろげならべる、なるほど。

女1 なんかわかりましたか？

女2 うーん、なんとなく

女1 かえってわからなくなりましたか？

女2 あ、わかります。

女1 ですよ。でも、つい調べちゃう。

女2 わかりますわかります。

女1 いいんじゃないですか

女2 なんか、ま、こんなふうにはひつかかるのが、かえっていい、かな。  
うん、この違和感。演劇って違和感を醸すものだと思うんです。

女1 違和感。

女2 調べなくっていいですよ。

女1 あ、そう？（残念）

女2 違和感、違和感、です、うん、あれっ？ってひっかかる感じがなんというか、そもそものはじまりにあって、

女1 …

女2 そもそもなんでもかんでもうまくいくわけないんですよ。

女1 「そもそも」に最初、発端、という意味があるから、「そもそものはじまり」って、「そもそものもそもそ」ですね。

女2 あ、調べたんですか？

女1 ちよつと耳に違和感があったから気になって、

女2 間違いですか。

女1 いえ、ええ、気になさらないで。

女2 そもそも、そもそもってなんなんでしょう

女1 そもそものもそもそ…

女2 あ、そうだ、（包みを出す）ご挨拶にと思って（包みを差し出す）

女1 （受け取って）まあ、わざわざ、ご丁寧に、すみません、

女2 焼きドーナツなんです、もそもそしそうですけど。

女1 もそもそ…

女2 そもそも忘れていたんですね、お渡しするの。そもそもそもそもって言っって、もそもそドーナツと思ひ出しました。

女1 ごちそうさま、お茶、いれますね。

女2 いただきます、あ！

女1 どうかしましたか？

女2 自分で持つてきて「いただきます」ってどうなんでしょう。変じやありませんか？

女1 変じやなかったですよ。（お茶をいれながら）私はどうでした？

女2 ？

女1 違和感、なかったですか？

女2 ええ。

女1 さつき、わざわざどうも、みたいに申しましたでしょ。わざわざって、つい使ってしまうんですけど、なんかわざわざって、しなくてもいいことをしている、と言ってるみたいじゃありませんか。

女2 そうですか、そうかしら。

女1 じゃあ、何て言えばいいのかって、口に出してしまってから、考えるのね、

女2 何て言うんですか

女1 さあ。

女2 え？

女1 知らない、考えるところまでなの、いつも。

女2 調べますか？

女1 今度でいいです。もう言っちゃったから。

女2 なにか条件とか、あるんですか？ここをお借りする、

女1 ないんですけど、誰にでもお貸しするわけじゃないんです。

女2 はい、

女1 （ドーナツ）おいしい

女2 そうですよね、上はお住まいですか？

女1 ええ、主に猫が。ああ、猫が苦手な方はダメです。

女2 大丈夫です。

- 女1 (女2にも食べるようにすすめる)
- 女2 ほかにほ?
- 女1 すぐに思いつかないから、なにか他に質問してください、
- 女2 二十席くらい作ろうと思うんです。つめて、
- 女1 つめてね、はい。ああ、そうだ、猫のつめ展、
- 女2 え?…
- 女1 いろいろな布を短冊状に垂らして、猫を放す
- 女2 え?
- 女1 猫がじゃれついて、布にいろいろな爪痕がつくでしょ、
- 女2 はい
- 女1 ほら、こんな感じ? (猫がひっかく動作を真似て)
- 女2 いちばん高く跳んだ猫が優勝
- 女1 えっと… (名刺を確認する)
- 女2 はち、です。賞品は伏見大島のいりこ、なんて。
- 女1 はちさん、本名?
- 女2 本名じゃないですよ、苗字がないじゃないですか
- 女1 おもしろいですね、はちだなんて。落語がおすきななの?
- 女2 お好きってほどじゃないです。まったく興味がないわけでもないですけど。八田といいます、本名、八にたんぼの田
- 女1 八田だからはち、ふうん (あつという間に興味を失っている)。
- 女2 下の名前は。小百合です。
- 女1 吉永小百合のさゆり?
- 女2 そう。親がつけたんです。
- 女1 いい名前ね

女2 ええ。…。

女1 はったさゆり、さん

女2 名前負けですよ。

女1 負けちゃったから、はち、にしちやったの？

女2 まあ、そうです。

女1 負けを認めるなら、いさぎよく、小百合を名乗らないと

女2 え？

女1 小百合って名乗ってくれないと、そんなところで勝負していることすら、私にはわからないから

女2 はあ。

女1 ね。(うながす)

女2 八田小百合、です

女1 小百合って、吉永小百合の小百合

女2 そうです、親がつけました

女1 で、私がああなたの顔をまじまじとみる、で、あなたが、名前負けですよ、という、まあ、たしかに吉永小百合には勝てないだろう、と私は思う、思うだけね、口には出しませんがね、でもね、吉永小百合じゃあ、誰だって負けます。

女2 ですよ。

女1 吉永小百合は手ごわい、さすがに吉永小百合だって歳をとるだろうと思っていた、いや、歳はとったけど、すごいよねえ、ますます美しくなっ、

女2 化け物かって。

女1 名は体を表す…

女2 猫の爪展はどうだったんですか？

女1 え、ああ、猫の爪展はまだです。

- 女2 (奥の白い布をみて) ああ、まだなんですね。
- 女1 もっとつめないと
- 女2 猫の爪展、だと猫の爪をみせるのかと思いませんか？ 猫の爪にネイルアート、やる方はきずだらけ、みるにも一苦労、なんて。
- 女1 思いますか。
- 女2 いや、まあ、ありきたりでも写真や映像の方がお客さん入りますよ、きつと。
- 女1 じゃあ、猫につめという名前をつけて、猫のつめ展
- 女2 …
- 女1 なんか見失っちゃいました。
- 女2 そうですね。
- 女1 椅子の話でしたね。こっち(「演劇展」)をつめましょう。
- 女2 お願いします。
- 女1 椅子には誰が座るんですか？
- 女2 誰って、そうですね…
- 女1 どうかしましたか
- 女2 お客様、観客なんですけど。誰なんでしょうね。
- 女1 じゃあ、誰かってことは置いておいて、椅子に座って何をするんですか？
- 女2 何もしませんよ。見るだけ。拍手してくれたら嬉しいけど。
- 女1 見るだけなら立っててもいいんじゃないやありませんか？
- 女2 それは、やっぱり疲れちゃうから、立ったままというわけには
- 女1 疲れちゃうんですか？
- 女2 一時間。二時間以内にはしますけど。
- 女1 つらいですね。

女2 わざわざ見に来てもらうんですから、あんまり短いのもどうかな  
って。

女1 でも、短い時間なら、椅子いらないうえですね。

女2 ？！

女1 何もしないんですよ、退屈しないですか？

女2 場合によります。

女1 椅子に座って一時間何にもしないで見ているだけなんて。立った  
まま二〇分くらいで終わった方がいいんじゃないやありませんか？

女2 もしかするとそうかもしれません。

女1 二〇分だったら、わざわざ行かなくってもって思うかもしれない、  
そうしたら、わざわざ来ないから、あなたもわざわざお越しいただいて、  
と恐縮することもない。

女2 だから、椅子がいるんです。

女1 はい。

女2 わざわざ来てほしいんです。

女1 なぜ？

女2 ……そうですね…

女1 いや、わかりますよ、そういうものです、ええ、二〇分でも来ま  
す。それは、わざわざじゃないんですよ。二〇分でも行きたい時は行くし、  
一時間でも座れるから来るというわけじゃない、そこは、わからないんで  
す。

女2 はい。

女1 椅子は持って来ーい。

女2 いやいや、あ、どーかなあ。

女1 二〇脚ですと、別に料金がかかります。

女2 はい。どれくらいかかりますか。

女1 ちょっと調べないと、初めてなので

女2 自分で用意してもいいですが

女1 ダメとはいいませんが、私にみせてから決めてくださいますか。

女2 え？

女1 あ、ごめんなさい、やっぱりダメです。

女2 あ、はい…

女1 こちらで選びます。だって、小百合さんがきめていらして、それが私の気に入らなくて、だめって言ったら、あんまりいい気持ちしないでしょ。だから、もう最初からこちらで決めることにします。

女2 お願いします。

女1 あ、ちよつとわだかまりましたね。

女2 いえ。

女1 うそ。

女2 オプションつけて、商売するのかなって。

女1 なるほど

女2 困ったな、と思いました。予算はちゃんと取ってあるんです、でもそれ超えてしまったら。どうやりくりしようか、と。

女1 もっともなご心配です。

女2 お気を悪くなさらないください。そういう方じゃないとわかるんです。わかるんですけど、そうわかる自分に自信がもてない。わかりますか？

女1 はい。

女2 よかった。

女1 私は、お金ならいくらでも出すから好きに使わせるとおっしゃるお客様にはご遠慮いただきます。ここを貸す、のが私の仕事です。ここ、

を、使ってもらおう、大事なのは、ここ、でしょ。ここをどんな場所にしようか、と考える、お客様とこの空間をどう結び付けようか、

女2 ええ。

女1 ここを使いたいという方の発想は大事にしたい、この空間も大事にしたい、でしゃばらないように、でも負けないで私がまとめる。デザインする

女2 あ、それ、なんかいい感じですよ。

女1 よかった。なかなかわからない方もいらっしやいます。

女2 誰にでも貸すわけじゃない、とさつきおっしゃったのはそういうことですね。

女1 まあ、威張る人が嫌いで、怒る人が苦手、なんです。

女2 わたしもそうです。

女1 (微笑む)

女2 (ドーナツを食べ、紅茶を飲む)

女1 何か聴きませんか？

女2 あ、はい。

女1 (なんらかの音響設備を操作すると、音楽が流れだす。マイクを手にする)

女2 ! (BGMをかけるのだとばかり思っていた)

女1、「母の思い出」(邦訳 矢田部道一)を歌う

女2 (あっけにとられている)

女1 「母の思い出」という曲です。

女2 (拍手する)

女1 この曲を歌いたいな、と思つて。

女2 (うなづく)

女1 それつて誰かに聞いてほしいつてことなのね。

女2 (拍手)

女1 ありがとう。

女1の電話から着信音。

女1 失礼します。(電話に) もしもし：それは困つたねえ、：うん、大丈夫。こつちは大丈夫だから、ゲロとシッコとウンちやんかたづけてから：あ、うん〇はないのね、うんうん、ソレかたづけて、それからでいいから：悪いね：(切る) 小百合さん、

女2 あ、はい

女1 お時間ありますか？

女2 あります、大丈夫です。私、いっぺんにひとつのことしかできなかつて、だから、今日はこれだけしか用事がないんです。

女1 留守番をお願いしてもいい？

女2 はい。

女1 母をひとりにおけなくて。友達に頼んでいたんですけど、ちよつと遅れそうだと(電話)

女2 ええ。大丈夫ですよ、はい。

女1 友人もおつつけ来ますので、お会いしたばかりでこんなことを頼むのもなんなんですけど。ここにいていただくだけでいいですから。

女2 はやく行ってあげてください。

女1 …、いえ、母はここにいるんです、

女2 あ、ああ、そうですか、いえいえ、私が勝手に、あ、そうなんです。お母様をひとりにしておけないって、そういうことなんです。

女1 ここ（カーテンの中）に…

女2 そこに？ うわ、すみません、全然気がつかなかった。

女1 いいんです、心配しなくてもいいんです。

女2 いえいえ、私が鈍感なんです。（声をひそめて）お休みになってるんですね。

女1 耳も遠いから。

女2 はあ。

女1 目は覚まさないので、

女2 そうなんですか、ご病気で、

女1 ええ。入院していたの。

女2 退院されて、（ここに？）

女1 ええ、病気が治らなくて、病気で亡くなって、亡くなったら病気がじゃなくなったのね、

女2 ？

女1 病気じゃないから病院にいられなくなって…

女2 ！

女1 ここに。

女2 お母様、亡くなられたんですか？

女1 はい。ここに居るのは、亡くなった母です、亡くなってますけど、母でなくなつてはないです。私、一人っ子だったから、

女2 そんな、大変な時に、こんなことで…、すみません

女1 いいんです、こればかりは、いつって予定できるものじゃないし。こちらこそ、変なお願いをして、すみません。

女2 私で大丈夫でしょうか？

女1 今ね、お線香もこうクルクルうずまきになっていて一晩消えないから。ここにいてくださるだけで

女2 わかりました。

女1 じゃ、ちょっと、失礼して。すみません、おねがいします。

女1、出ていく。

女2、ひとりになって、お茶を飲んで立ちあがって、

カーテンに むかって、お辞儀をする。

女2 はじめまして。あの、は、八田、小百合と申します。八つの田んぼに、吉永小百合の小百合、です。あ、聞こえてましたか、そうですか。

ほそぼそと演劇をやっております。アマチュアです。なかなか演劇で生活できるものではありません、若いころはそれをジレンマと感じていましたが、この頃は、むしろ好ましいと考えるようになりました。なんていうか、仕事じゃないんだから、やってもやらなくてもいいんです、それでもやっている、物好きなんですよ。ばかだなあ、って。…至らないとは思いますが、…ここにおりますから。

女2、座る。

女2 (お茶を飲む。どうすればよいのかがわからないので、手持無沙汰にみえるが、ただどうしようか考えている、お茶を飲む。空間に静けさが満ちてくる、お茶を飲む。せきばらいをする、前を見る、うつむく、首を右に左に傾ける、きこえない音をきいているようにみえる。お茶を飲む。)

女2、ついに、トイレにたつ

二

女3が入ってくる。

女3 ごめんください、（と呼びかけながら、入ってくる。飾り過ぎずくだけすぎず、身なりのよい老婦人、「観客然」としている。ここをギャラリ―つまり画廊と知っている様子で、きよろきよろしている。しばらく、白いカーテンを仔細ありげに眺めているが、次にカーテンの向こうを見に行く）

女3、白いカーテンの向こうに消える。

女2、戻ってくる。

女2 （トイレにいったので、少し落ち着いてきた。ふたたび、カーテンの向こうに語りかける）…小さい頃、母のスカートをつかんで一緒に歩いたことをよく覚えています。母の両手はふさがっていたんですね。弟の手をつないで、買い物かごを持って、前掛けして、ネッカチーフで髪をおさえて、つかかけサンダル、買い物かご、小さい私は、八百屋さんに「おかあさんみたくになりたい」といって、いたく感心されました。八百屋さんがなんてきいたのか、おぼえてないんですけどね、なんだか、すごくほめられて、悪い気はしなかったんですよ、だから、よく覚えてます。それが、いつか、母のようにはなりたくない、って思い始めて。母は専業主婦で、パートタイマーで、家族のために働いて、世話をして、心配をして、…私は、「心配してくれて頼んだ覚えはない」と母に言いました、はたちの頃です。自立とか自活とか、そんなことを悩みながら、物書きになろうとしてました。映画のシナリオの講座に通い、コンクールに応募するんだと徹夜で仕上げたシナリオを母がコピーしてくれました。まだ、原稿用紙に手書きしていた頃のことですから200枚位、ひと仕事です。母だって暇

じゃなかったはずなのに、ひとことも文句を言わない。といって、ほめもしない。ちゃんと就職もしないで、そんなことをやっている娘を心配していたのはわかりました。でも、私に手を貸した母はちよつといきいきして、ちよつと嬉しそうだった。コンクールにはもう一次で落ちちゃったんだけど、母はそのことには、何も言わなかった。それでもなんか書いている私のことを、ほっておくことで応援してくれてた、そういう母のおかげで、私は、悪くない人生を送っているなあ、って。成功はしなかった、金持ちにも有名にもならなかった、上手な生き方じゃない、…でも悪くない。

女3がしよんぼりとした様子で、出てくる。

女3 (女2によびかける) 小百合。

女2 (驚いて声がでない)

女3 人は、死ぬとどうなるの

女2 おかあさん、どうして(ここへ来た)?

女3 だって、あなたのお芝居は必ずみにきているじゃない。それがこんなことになっているなんて。ごめんね、おかあさん、悪気はなかったよ。

女2 え?

女3 まさかねえ、自分のお通夜で中止にしちゃうなんて。

女2 お通夜? 誰の?

女3 わたしの。

女2 おかあさんの? おかあさん、ここにいるじゃない。

女3 いる。死んでたなんて思わなかった。うっかりしてた。

女2 ちよ、(つと) …

女3 死ぬとどうなるかって、考えたことある?

女2 考えたってわからないと思う。

女3 死ななきやわからないのねえ、まさか、知らないうちに死んでるとはねえ、

女2 死んだら、脳も死んじゃうから、わからないでしょ。いや、何？

女3 そうそう、わからないの、だから、自分が死んだってわからないの、わかった？

女2 わかった。いや、わからない。何の話？

女3 困ったな、ねえ、なんて言えばいいんだろ…死んでしまっごめんなさい？ お先に失礼します？

女2 挨拶？ 挨拶してどうするの？

女3 聞いたことないもんね、どうも、死んだみたいです、すみません。後のことお願いします。なんか悲しくなってきた、自分のことなのに自分じゃ何もできないんだ。わるいねえ。

女2 死んだらそんなこと考えないから。

女3 それがそうでもないよ。手も足も出ないってこういうことなんだ。

女2 ちがうと思う。

女3 それは、お前が死んだことないからだって。

女2 死んだことのある人なんて、そうそういないよ。

女3 そりゃ、死んだことある人は死んでるから。

女2 おかあさん。

女3 はい。

女2 おかあさん、死んでるの？

女3 そうらしいよ。

女2 なんで？

女3 なんで？ そうか、それがわからないのよねえ。

女2 死んでるようにはみえないけど。

女3 でしょう。死んだ気がしないのよ。そういうものだったのね。

女2 じゃあ、死んでないってことでいいじゃない。

女3 そうもいかないよ、死んでるんだから。

女2 そうか。

女3 うん。

女2 うん。

女3 わるいね。

女2 いいから。

女3 うん。

女2 大丈夫だから。

女3 小百合、元気でね。

女2 おかあさんもね。

女3 うん、死んでるからね、きっと元気にするのは、せいっぱいが  
んばらないといけないと思ううけど、そうしてみるから。

女2 生き返っちゃうかもね。

女3 (笑って) どうかかな？ ちょっとみてくるわ。

女2 え？

女3 (白いカーテンの中を見に行く) :

女2 (も、ついていく、が

女3 (みて、確かめて、くるりと振り返って

女2 (中をみようとするところで、女3とぶつかって

女3 (椅子にもどる

女2 (も、椅子に座る。中はみられなかった

女3 (考え込む)

女2 (立ちあがって、見に行こうとする)

女3 (それを制して) そうそう、(紙袋をテーブルに置く) これ、差し入れ。

女2 さしいれ?

女3 自分のお通夜に差し入れを持ってくるなんてね…。いや、もちろんそんなつもりで買ったんじゃないよ、結果として、意外にもそんなことに、(なつて)

女2 (その袋をみて) ドーナツ

女3 花よりだんご。

女2 ありがとう

女3 死んでいるって、ドーナツの穴になった気分、あるんだかないんだか。

女2 食べたら穴はなくなっちゃうよね。

女3 穴は食べられないから、なくなっていないんじゃない?

女2 なくなつてない…

女3 だからあるんじゃない。あるけど見えない。

女2 でも、おかあさん、見えてるけど。

女3 まあ、そういうこともあるのよ、

女2 いや、だから…

女3 だって、あそこで死んでいるじゃない

女2 あれは…、いや、あの方は、おかあさんじゃないの。

女3 いや、わたしだったよ。

女2 ちがうんだつて…

女3 自分のことだもの、まちがいない。

女2 ほんとに?

女3　そこにわたしが死んでいて、じゃあ、ここに座っているわたしは誰なんだろう…

女2　おかあさん…

女3　ドーナツ食べない？

女2　うん、

女3　あれ？袋がふたつある。

女2　あ、それは…（私が、と言いかける）

女3　そうか、わたしが持ってきたんだ

女2　え？

女3　なるほど（合点がいった様子）

女2　？（女3の納得についていかれない）

女3　どれにする？（ドーナツをとりわけける）

女2　お茶煎れる。

女3　（ドーナツを食べる）

女2　（同じく）おいしい。

女3　（お茶を飲む）そうだそうだ、忘れるところだった、（バッグから切り抜きを出す）これ、読んで。

女2　（うけとって）新聞？　投書欄？

女3　おとうさんがね、切り抜くの、新聞、隅から隅まで目を通して、きちんと折り目をつけて畳んでいくの。で、なんかしら切り抜いてる。

女2　まあ、ヒマだから。いいことじゃない。投書といえは、おかあさんも新聞に投書が載ったことあるじゃない。私が中学生の時、制服はなかったほうがいい、って。

女3　ああ。

女2　洗濯ができなくて、不潔だから、って。

女3 そうよ。たたくと埃がでるんだから。

女2 くるまひだのスカートね。埃をたつぷりすいこんで重たかった。

女3 セーラー服に白い襟カバー、カバーを替えるだけじゃあ、ねえ。特急列車の座席じゃないんだから。

女2 着るもの考えなくていいから楽だったけどね。(切り抜きを読んで)「人殺し命じられる身 考えて」…大学名誉教授 石田 雄、東京都、91、九十一！

女3 学徒出陣って書いてあるでしょ。学徒出陣した人ももう九十なのね。

女2 (読む)「積極的平和主義であれ、集団的自衛権の解釈によってであれ、海外での武器使用を認めることになれば敵とされた人を殺す任務を果たす兵士が必要となります。旧日本軍兵士であり、政治学を研究してきた一人として、安倍晋三首相には、こうした人のことを考えて政策決定してほしいと思います。

女3 「私は、米英帝国主義からアジアを開放する正義の戦争だと思っていた軍国青年でした。しかし学徒出陣を命ぜられた時、どうしても人を殺す自信がもてませんでした。せめて見えないところで人が死ぬほうがいいと、海軍を志願しました。体が弱く認められず、陸軍の要塞重砲兵を命じられました。目の前で人を殺さずに済むと安心しましたが、軍隊はそんな生やさしいものではありませんでした。」

女2 「命令されれば、いつでも人を殺す訓練をするのが軍隊でした：捕虜になった米兵を殺せという命令が出た時でも、…従わないと死刑になる問題に直面しました。」

女3 (黙)

女2 「戦争で人を殺した兵士は、ベトナムやイラクで戦った米兵を例にとっても心の問題で悩んでいる人が少なくありません。殺人を命じられる人の身になり、もう一度、

女3 …

女2 憲法9条の意味を考えて下さい。」

女3 言いたくはないのよ、誰も。

女2 え、

女3 思い出したくないのよ、誰だって、いい思い出じゃないんだもの。

女2 うん、そういえば、おばあちゃんから戦争中の話、ひとつも聞いたことがない。

女3 戦争が終わった。平和になった、でもまたいつ戦争になるんだろう、いつまで平和が続くんだろう、

女2 あ、私にはそういう感覚がないかも。

女3 戦争の話をしたら、それを聞いて戦争が息を吹き返すんじゃないか、

女2 うん。

女3 平和憲法っていうのは、その魔物を封じる御札、護符、だと思った。だから、憲法を変えるって言われると怖い。わかる？

女2 (うなづく) (間) おかあさん、投書の謝礼に満州の写真集、もらったよね。

女3 お金くれればいいのにね。本の目録送ってきて好きなものを選んで。自分でお金出しては買わないって思ったから、あれにした。生まれ育ったところだけど、もうなくなってしまった国。

女2 ほんとに制服、いやだったんじゃないの？ 軍服だもんね、セーラー服も詰襟も。

女3 さあ、そうかもしれないけど。子どもが中学に入学したら、やっぱり嬉しいでしょ

女2 そうだね、私もうれしかったな、制服。

女3 …女学校に入った時に、スケート靴の刃をはずして、編上げの通学靴にしてね、

女2 へえ。すてきじゃない。

女3 素敵だったよ。でも、すぐに盗まれちゃった。玄関に置いてあったのに。

女2 えっ

女3 終戦の年だったから。もう物がなくて、盗まれちゃう、戦争だから。

女2 あ。私が小学生の時、白い編上げのブーツ買ってもらったじゃない。私としては、もう、すっごい、おしゃれだ！ってうれしかったな。それ見ておばあちゃんが「ずいぶんハイカラなの履いてるね」って。ハイカラって、聞いたことなくて、でもなんか特別な言葉で褒められたぞ、ハイカラか、ハイカラね。スキップでもしたい気分。だったよ。もしかして、おかあさんのその靴のこと思い出したんじゃない。

女3 ハイカラ、ね。おかあさんらしい。

女2 病院にね、おばあちゃんのお見舞いに私、ひとりで行ったことがあって。そのとき「おかあさんはかわいそうだ」って言われた。もうちゃんとしやべれなくなってたのに、しぼりだすように、おかあさんがかわいそう、って。もしかすると、そんな頃のことまで思い出していたのかもね。

女3 ふうん…

女2 そのときは、私が叱られた気がしたけど。お前はちゃらちゃらしてるって。

女3 (笑う) それでしょ。

女2 いいじゃない、脳天気、極楽蜻蛉。戦争なんかしないもんね、これがほんとの積極的平和主義だ。

女3 (あらためて切り抜きをみる) おとうさんは何考えてるんだろう。

女2 …

女3 (ドーナツを食べ終わって) あーおいしかった。こんなお通夜もいいね。

女2 もう一個食べれば？

女3 食べすぎは体によくないから。

女2 からだによくない？ (笑う) 死んでるのに。

女3 死んでるのはむずかしいわよ。なんせ医者にかかれなから。

女2 むりしないでね。

女3 (微笑む)

女2 (微笑む)

女3 そろそろ帰ろうかな。

女2 大丈夫？

女3 大丈夫？ 大丈夫よ！

女2 どこへ帰るか、わかる？

女3 何言ってるのよ、家に決まってるじゃない。

女2 送って行きたいんだけど。

女3 ひとりで来たんだから、ひとりで帰れるわよ。

女2 うん。

女3 あなた待っていると遅くなるから。

女2 まあ、うん。

女3 そこに「わたし」置いていくけど、

女2 え？ ああ。

女3 いいよね、ひとりで来たんだから。ひとりで来たら、ふたりになつちやつたんで、え？ ふたりじゃないか、死んでるんだから。ゼロと一人で…ひとり。で、ゼロは置いてって、まあ、ひとりで帰ってもいいよね。

女2 大丈夫。わたしがいるから。

女3 おとうさん、待ってるから。ごはん作らないと。

女2 おかあさん、

女3 ん？

女2 おとうさんには、言わない方がいいよ。

女3 なに？

女2 だから、ここで、…お通夜したこと。

女3 ああ、言わない、言わない。呆けたと思われちゃう。

女2 うん。

女3 あなたもたまにはうちに顔出しなさいよ、忙しいとは思うけど。

女2 うん。そうする。

女3 じゃあね

女3、去る

女2、二枚目の切り抜きを読む。

女2 (しばらく黙読) : 戦前、戦争に向かっていった時代と非常に似ていますね。しかし、この年ですから、デモにも行けないし、官邸前で大きな声をだすわけにもいかない。社会科学者として何ができるか。切実に考えて、やむなく朝日新聞に投書したのです。

静寂

女2 : 一番恐れているのは沈黙の螺旋です。出る杭は打たれるからと黙っていると、その沈黙がだんだん広がって誰も声を出せなくなる。若い人の方が「出る杭は打たれる」と心配するでしょうから、ここは年長者が声を出さなければいけないと思います。

ボリス・ヴィアン「脱走兵」が流れる、暗転。

三

女5が入ってくる。

女5 すいません。リリイです。こちらは「猫の家」でしょうか、もしも  
くし。お通夜はこちらでしょうか？

暗くなる。

女5 …

声 (カーテンの中から) ダレ？

女5 え？

声 ココハ、ドコ？

女5 えっと。ここは、「猫の家」、です。

声 アナタハねこナノネ

女5 ち、ちがいます…

声 ウソ、ねこデシヨ

女5 え、と(なんと答えていいのか…考えている)

声 ヤッパリねこダ

女5 ちがいますよ、あのニンゲンですよ。

声 ねこハ、ミンナ、ソウ言イマス。

女5 はあ。

声 オムカエニ、キテクレタノ？ たまちゃん？

女5 いえ、リリイ。あの、私はまだ生きてるので、どっちかと言えば  
お見送りに(来た)

声 (声を荒げて) 見送りダツテ？ ワタシニ、何処へ行ケトイウノ  
デスク？

女5 ! (怖)

声 りりいサン?

女5 はい、

声 怖ガラナイデ、クダサイ

女5 ?

声 コワクナイデスヨ。

女5 はい。

声 ジャア、歌ツテ、クレマスカ?

女5 いいですよ。

♪音楽『オール・オブ・ミー』♪

前奏流れる。

声 これでどうですか?

女5 「オール・オブ・ミー」ですね。

声 この世に魂だけ残しては行けない、という歌です。

女5 ちょっと、ちがうと思います。(歌う)

歌の途中で女4がカーテンの中からでてくる。

歌が終わって、

女4 (拍手) ようこそ、「猫の家」へ。

女5 先輩、おどかさないてくださいよ。

女4 わかった?

女5 最初は真に受けましたよ。胆つぶしました、もう、勘弁してください、寿命ちぢんじやいます。

女4 ごめん、ごめん。

女5 まさか、お通夜も冗談ですか？

女4 それは、ほんと。ブログに書いた通り。

女5 お友達の…？

女4 親友。私も彼女も一人っ子で。…。

女5 ご愁傷様です。

女4 まさか、ブログ見て、来てくれるなんて。

女5 お通夜は賑やかなほうがいいと思って。

女4 ありがとう。

女5 知り合いじゃないですけど。

女4 その点は大丈夫。オバサン、慣れたと思う。

女5 慣れた？

女4 さっきまで、ここのお客さんにお留守番してもらっていたの。私  
が間に合わなくて。

女5 お客さん？

女4 ギャラリーはお休みしてるんだけど、ここを使いたいって人が下  
見に来て。

女5 へえ。

女4 ここで演劇をやりたいんですって。

女5 演劇、ですか。

女4 面白そうだから、やってみようと思っ

女5 先輩が決めちゃうんですか？

女4 いいのいいの。リリイもどう？

女5 どうって？

女4 ここでなにかやらない？

女5 ……なにかって、なんでもいいわけじゃないですよ。

女4 なんでもって、たとえば？

女5 例えば…、ネッコ、展

女4 いいんじゃない。ここ「猫の家」だし、

女5 ネッコですよ。

女4 ネッコ？

女5 木の根っこ

女4 あなたそんなもの集めてるの？

女5 ええ、まあ。

女4 へえ、変わってるわね。好きなの

女5 はい、もう。

女4 いつから？

女5 おととい。

女4 ……ほかには？ ほかになにかある？ 「なんでも」

女5 なんでも…

女4 特技とか

女5 ウガイ？

女4 鵜飼？

女5 ウガイです。いい音、奏でられるんです、密かに特訓も積んでま

女4 そうなんだ。

女5 聞きますか？

- 女4 いい。
- 女5 え？（やるきまんまんだった）
- 女4 今日は、いいや。
- 女5 あ、そうですね、お通夜ですから
- 女4 他にもなんかあるの？
- 女5 そうですね、空中浮遊とか、透視とか
- 女4 できるの？
- 女5 はい
- 女4 マジ？
- 女5 でも、お見せできません。
- 女4 どうして
- 女5 お見せできないんです。
- 女4 できないんでしょう？
- 女5 いいえ、お見せできないんです。
- 女4 じゃ、いいや。
- 女5 よかった。怒り出す人がいるんですよ、こう言うと
- 女4 そうなの？
- 女5 うそつきだって責められます。
- 女4 うそつきって、でも、トムピリピが二隻お船を持っている、って聞いても、誰も、怒らないよね。
- 女5 それはトムピリピがうそつきだからでしょう。
- 女4 え、なにになに？
- 女5 自分ほうそつきだっていう人はほんのこのことを言ってるんですよ。

女4 言っているほんとのこと自分がうそつき、だったら、うそつき  
つてうそだから、ほんとのことを言ってる… ほんとだ。じゃ、うそつき  
じゃないじゃん。

女5 なんの話でしたっけ。そうそう、それで、そういう人たちは見せ  
たって、インチキといいますが、目で見れば見えることも、見ようとし  
ない。先輩がそうだって言ってます、べつに見たくないですよ。

女4 まあ。今日はいいです。

女5 先輩こそ、なにかないんですか？ 講演会、どうですか？ ブロ  
グの中からテーマを決めて

女4 でもフォロワーはブログ読んでるし、ブログ読まない人は私を知  
らないし、

女5 ダメですね（くしゃみをする）先輩のお友達も猫がお好きなん  
です、お店の名前を「猫の家」にするぐらいですから。

女4 あ、もしかして、アレルギー？

女5 （カバンからティッシュをだして、涙をかむ。カバンの中にはテ  
ィッシュボックスが入っていて、効率よくティッシュがでてくるようにな  
っている）ネコは大好きなんです。くしゃみと鼻水だけです。ティッシュ  
がある限りはおつきあいできます。

女4 お茶煎れようか。

女5 私はこれ（持ってきたビール）で。

女4 （ドーナツの袋を手に取り）これ、なんだろう。

女5 ドーナツです。

女4 え？ なんて？ 透視？

女5 書いてあります、そこに（袋を示す）。

女4 なんだ。（袋をかざして）何個入ってるでしょう？

女5 さあ。

女4 みえないの？

女5 はい。

女4 ふうん。

女5 パンツのヒマワリだけです。

女4 パンツのヒマワリって何？

女5 先輩ですよ、あのハイセツブツの固形のヤツの一般的な呼び方を  
するなど言ったでしょ、アレルギーがでるから、ヒマワリと言えって、言  
いましたよね。

女4 うん、言った。

女5 だから、パンツのヒマワリだけです、透視できるの。

女4 …。へえ…

女5 用をたして、拭いて、その後なにがどうしたか、パンツにヒマワ  
リがついてることって、あるじゃないですか。

女4 うゝ、ある、と言ってしまうと、私がそうだとやっていることに  
ならない？ なんていうか、まあ、でも、あると思うよ、うん。

女5 先輩は、シロです。

女4 白じゃないわよ、ピンク、シルクです。

女5 パンツの色のことですか？ パンツの色はみえません。ヒマワリ  
ついてない、ってことです。

女4 あ、そうか。教えて損した。

女5 ついてる人にはいえませんから。

女4 あ、うん。

女5 だから、大勢人がいるところでも、言えません。気まづくなりま  
すから。

女4 気まづく、うん、なるよね、たぶん。なんだか、やな、能力ねえ。

女5 まったく迷惑以外のなにものでもありません。

女4 せっかくの特殊な能力なのねえ、

女5 なんにもならないです。

女4 もつたいないねえ。

女5 あのですね、たとえば、「わたしにはパンツのヒマワリがみえま  
す、じゃくん、パンツにヒマワリがついてるのはあなたです（適当に指さ  
す）」と言ったって、その人絶対、「当たり前です！」っていわないですか  
ら。

女4 ま、ね…

女5 下手したら私、名誉棄損とかで訴えられちゃいます。

女4 ちがいます、ついてません、という人のパンツ無理やりみるわけ  
にもいかないし。

女5 いやむしろ、みせる、って言われたら、困るし。

女4 困るね。

女5 はい。そんなわけで、まったく検証できない。みえるんですけど、  
あるものをみているのか、ないものがみえているのか、わからないん  
です。

女4 やっかいだねえ。

女5 もう、慣れました。

女4 誰でもするものだから、たまにはついちゃうことだってあるよ  
ね。

女5 そうなんですよ。でもねえ、たとえば、先生とか上司とか偉い人  
に怒られるとすんじゃないですか、で、「あ、ヒマワリついてる」って…。

女4 （笑う）ははは…。いいね、「あ、ヒマワリついてる」

女5 知らん顔してるんですけど、態度には出さななんですけど、なん  
か、わかつちやうのかなあ、余計に怒らせてるような気がします。

女4 「あ、ヒマワリついてる」

女5 たいしたことじゃないと思うんですよ、洗えば済む話だし。

女4 「あ、ヒマワリついてる」

女5　むしろ、そのためのパンツなんじゃないか。そこに留めるというか、そこできいとめるというか、ヒマワリのためのパンツというか。

女4　「あ、パンツついてる」…あ、まちがえた。

女5　先輩、楽しそうですね。

女4　いやいやいやあ、そんなことないない。(芝居がかって、国会風に)総理大臣安倍晋三くん、「あ、ヒマワリついてる」　ねえねえ、みんなヒマワリついてるといいねえ。

女5　まあ、最近はおオッシュレットが普及したので、あんまりついてないですよ。

女4　あら、残念。

女5　ヒマワリ、どこに行くんだろう…

SE　トイレで水を流す音、じゃ〜

音楽〜「水に流して」〜

女4、女5、歌いながらはける。

四

女1、女2、椅子を並べている

女1　小百合さん、これでいい？

女2　はい、ありがとうございます。

女1　椅子に座るのは…

女2　観客、お客さんです。

女1　椅子の座って一時間、なにもしないでみてるだけなんて

女2 あー、それ、まだ言っちゃいます？

女1 なにもしないんでしょ？ 退屈しないのかしら立ったまま、二〇分の方がよかったんじゃないかしら…（言いながら去る）

女2 （ほんとの客席をみながら）さあ、どうだったんでしょ…

舞台奥の幕が開くと鏡、客席が舞台上に現れる

FIN

※実際は十五階にあるホールでの上演だったので舞台奥は窓で窓の外は夜だったのでカーテンを開け、客席に照明をあてて鏡にした。

北とぴあ演劇祭 2014 参加公演十月八日（水）開演十九時半

出演 女1・女3・女4 山崎千晴／女2・女5 八田小百合

台本 下川志乃ぶ／舞台 村木充／音響 高木聡宏／照明 菊池志乃ぶ・羽鳥久美  
子・菅温子 / ピアノ演奏 藤澤由二

協力 ドラシドハウス 本間由紀子・本間修二 / 三原和枝